

満点	60点	目標得点	48点	試験時間	60分	偏差値	71
大問数	2	小問数	31				
[解答形式]	選択式	26 / 31問	記述式	5 / 31問	論述式	0 / 31問	
[難易度]	C	1 / 31問	B	8 / 31問	A	22 / 31問	

※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す

Topics

- 1…現代文一題古文一題。計大問二題で時間は60分。
- 2…古文問八で漢文に関わる設問が出題。
- 3…「早稲田大学」らしい「とある一つのこと」に気付ければ爽快に問が解ける設問が散見される。

こんな力が求められる！

今回の問題全体を見渡して、どのような感触を得られるだろうか。分かることは、古文がほぼ基本的な問題であるということである。単語・敬語・文法・和歌の修辞・古典常識・文学史、すべてお茶ゼミのテキストの範囲内で解ける問題だ。問八は古漢融合問題ということもできるが、単なる抱き合わせにすぎず、特別なテクニクが必要というわけではない。そのことに関して、さらに細かく言うならば、問八で問われている「比翼の鳥」は夏期テキストや平常テキストでも間接的に触れる知識だ。このように古文はほぼ満点に近い答案を書ける力が求められるだろう。

古文が、前述のような性格をもつ以上、可否の分かれ目は現代文にかかってくる。しかし、現代文もお茶ゼミのテキストで幾度となく訓練する「対比関係」の文章だ。「対比関係」をすばやく見抜き、整理できる力が求められ、またお茶ゼミのテキストなら充分習得できるレベルである。また、Topicsにも書いたが、「早稲田らしい」問題も散見され、合格するならば凡ミスは許されない。

実際、手元にある復元答案でも、かなり高得点をとっている。しかし、この受験生は不合格なのだ。理由は明らかで、前述の凡ミスだ。よって、お茶ゼミのテキストを理解するだけでなく、何度も訓練をし、身体に染み込ませ、必要な知識を確実に、そして正確にアウトプットする能力が合格へとつながるだろう。

大問別分析

(一)

予想配点	36 / 60点	時間配分の目安	35 / 60分
文章の種類 / ジャンル	現代文・古文・漢文・古漢融合 /	評論・随筆・小説・物語・詩歌・その他	
[出典]	花田清輝『復興期の精神』		
[文字数]	四〇〇〇字		
『漢璧』レベル	問一の3のみ、『漢璧』の範囲外		
出題形式	マーク・記述併用		

小問別難易度

※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す

問一	1 A	2 A	3 B	問二	ア A	イ A	
問三	B	問四	B	問五	A	問六	A
問七	I A	問八	A	問九	B	問十	B
問十一	(1) B	(2) A					

お茶ゼミカリキュラムとの関連

漢字問題は、お茶ゼミのテキストで、充分合格圏内に到達できるもの。文章全体の構造としても、非常にオーソドックスな、対比関係。OS・ADどころか、ST・現代文専科のテキストでも、こういった類の文章は、幾度となくお目にかかる。

また、出典の『復興期の精神』は、お茶ゼミテキスト高三・三月期①三回で扱っている（ただし、引用箇所は異なる）。

●解答のポイント&学習対策等

まずは、全体の趣旨を確認したい。

第一〜四段落では、「ルネッサンス」と「生死」との関連についての筆者の問題提起から始まり、クラヴェリナの例えを用いつつ、「ルネッサンス」が「死」から「生」への「必死な抵抗」力を持つことを指摘する。筆者が問題とするのは、その「過程」であり、「結果」ではない。したがって、一般に流布した「ペーターの描き出したルネッサンス像」、および、東洋における、「死」がみのりゆたかな収穫をもたらすであろうという考え方」と、筆者の主張は軌を異にするものである。

第五〜第八段落では、前半で述べられたような、「死」から「生」へ、すなわち、「結末」から「発端」への運動を問題とするのは、「ポーの宇宙観」と軌を一にする、ということを描する。その「運動」の「構造」をどこまでも追究するポーの精神は、立場が変わっても通用する「普遍性」を持つものであり、そしてそれは「絶えず虚無を眼に浮かべ、結末から発端に向かつてさかのぼり、ふたたび虚無に帰る以外に、再生の道のないことを知っていた」彼自身の境遇とも関わっている。なぜならば、「絶望だけが我々を論理的に」し、「危機にのぞみ、必然に我々は現実にも関わって接近せざるをえなくなり、これまで見えなかったものが、ありありとみえてくる」からである。

以上を確認したところで、設問解析に入る。

問一 1・2は『漢璧』の範囲内。確実に解かなければならない。3の「能事おわる」はやや上級知識である。しかし、お茶ゼミが推薦する、『日本語チエック2000辞典』（京都書房）の298ページに掲載されている。基本事項は押さえ、高度な知識まで吸収する余裕のある受験生が解ける設問である。そういった意味で、ひとつの合否を分けるポイントであるといえる。

問二 いずれも常識レベルの漢字の知識。アの「非情」は「非常」との区別で押さえよう。

問三 直後に「ところが、（中略）以前の健康なクラヴェリナの状態に戻ってしまう」とあるのでは確実にあり得ない。

ポイントにあくまで、クラヴェリナは「仮死状態」であるということ。ロの「死んだことは疑いない」と強く言い切るのは過言であるように思われるし、ハの「生物学の死の定義」は本文の記述からやや離れてしまう。よって「死んでしまったように見える」というイを選択する。

やや、選択肢が紛らわしいきらいもあるが、まずは前後を見て、そこから内容確認、という解答の手順は空欄補充の基本である。

問四 前段落の「再生」⇨「クラヴェリナ」の例を受けての記述であるということ、直前の「かれらはクラヴェリナのように再生する。再生せざるを得ない。」という記述から、「人間⇨非人間」の対比関係を押さえることができる。二行後の、「ペシステイック」から、ハ「悲観⇨楽観」に飛び

つかないように。「ペシミスティック」は、あくまでルネッサンス期の人物への後世の評価に対する意見であり、ルネッサンス期の人間自体に対する意見ではない。

問五 **B** は筆者が否定している意見の文脈。したがって、マイナス語が入る。全体の構造、および趣旨がつかめていれば容易。

問六 問五と同じく、全体の趣旨を掴めていれば用意。文章全体に流れているテーマは、「死から生への逆行」である。

問七 I は「(主に東洋における)死が、みのりゆたかな収穫をもたらすであろうというような考え方」と同内容のものが入る。ヘガズバリ同内容。

II は、全体の趣旨の一部ともなっている。「絶望だけが我々を論理的に」し、「危機にのぞみ、必然に我々は現実にはむかって接近せざるをえなくなり、これまで見えなかったものが、ありありとみえてくる」ということと、同内容のものが入る。ただし、ニとホが紛らわしい。そういった意味で、解けなくても致し方ない設問である。

問八 筆者の主張↑↓「ペーターの描き出したルネッサンス像」&「(主に東洋における)「死」がみのりゆたかな収穫をもたらすであろうという考え方」の対比構造もまさに、全体の趣旨と関わるところ。したがって、「ペーター」とセットになるものは、「東洋」である。

問九 ロとハが紛らわしいのではないだろうか。読解の基本、全体の趣旨にそって考える。ポーは、「物理学」を通して、「宇宙学」を語っているのだ。また、**⑤**に入るのが「形而上学」だと文脈的に座りが悪い。よって、ロが正解。

また、語彙力の問題とみなすこともできる。「小宇宙⇨人間・芸術作品」↑↓「大宇宙⇨いわゆる実際の宇宙(⇨ポーが語っていたもの)」という関係である。そういった意味では、問一の3と同性格の設問ともいえる。

問十 本文の趣旨を丁寧を追っていくと、「かれらは「明るい未来」など考えられないように筆者には見えるが、にもかかわらず、考えているように見える」ということが読みとれる。したがって、空欄に入るのは「明るい未来」。しかし、傍線部から解答箇所が離れているので、探すのに苦戦するだろう。時間を効率よく使えているかが、問われる設問である。

問十一 (1)は、全体のテーマである、「ルネッサンス」と「生死」の関係、その部分を掴んでいけば、答えが浮かび上がる。ハで述べられていることは、あくまで筆者に映った「見掛け」であり、ルネッサンス期の人間が一般的にそのように見られてきたというわけではない。また、「理的(への疑問)」というワードが確実に「不幸であればこそ、理知は強靱になるのである」という記述と反する。全体の趣旨にからめれば、答えが浮かび上がり、紛らわしいものには、アンチワードが入っているという早稲田大学らしい設問。早稲田を指して、訓練をつんだ受験生は気持ちよく解いたであろう。(2)は同じく、全体のテーマを掴んでいけば容易。イは「物理学と文学を結びつける」、ロは「さまざまな対立する分野を統合」、ニは全体的に、本文の趣旨に反する。

【三】

予想配点	24 / 60点	時間配分の目安	25 / 60分
文章の種類／ジャンル	現代文・ 古文 ・漢文・古漢融合	／	評論・随筆・小説・ 物語 ・詩歌・その他
【出典】	『うつほ物語』	「菊の宴」	
【文字数】	約二二五〇字		
【あんころレベル】	★マーク付きの語彙レベルで対応可。		

出題形式 マーク・記述併用

小問別難易度 ※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す

問一	1	A	4	A	7	A	問二	I	A	II	B	問三	A
問四	x	A	y	A	z	A	問五	A	問六	A			
問七	A		問八	A			問九	B	問十	A			

お茶ゼミカリキュラムとの関連

知識問題は、お茶ゼミ生なら必須の内容。STクラスでも充分対応できる。問題文の前半は、お茶ゼミテキスト高三・一〇月期三回と同一内容。

●解答のポイント&学習対策等

問一 すべて基本単語の問題。とくに7では「あり」に「生きる」という意味があるということを知っていれば、爽快に解ける。これも早稲田大学らしい設問である。

問二 Iは選択肢がすべて当然訳せる語。前後の文脈から、ホ以外ありえない。IIはやや難か。「鶯」が源宰相に、「卵」が北の方たちになぞらえられている、と掴めているかがポイント。平素、いかに和歌の解釈問題に触れているかが問われる問である。

問三 問二と連関する。「卵」に、子供たちがなぞらえていることをまず押さえられているか。それプラス、本文の「殿の内、やうやく毀れ」という記述や、「ふる…古／経る」という定番掛詞に注目できているれば解答に迫り着ける。

問四 xに関して、「のたまふ」は「言ふ」の尊敬語。よって、動作の主体への敬意。主語が明示されていないので文脈判断。この部分は源宰相の手紙文カギ括弧内。したがって、主語は二人称の可能性が高く、ここは命令形で相手に訴えかけている文脈なので、主語は二人称（北の方）と考えることができる。よって、正解はハ。

yに関して、xと同じく、「のたまふ」、「言ふ」の尊敬語。よって、動作の主体への敬意。ここでは主語が「あが君（真砂子君）」と明示されているので、正解はニ。

zに関して、傍線部のすぐ上、「よる」という動詞があるので、この「たてまつる」は謙讓の補助動詞。よって、動作の客体への敬意。すぐ上に、「父君に（源宰相）」と客体はつきり明示されている。したがって正解はロ。

問五 基本的な文法問題。

問六 右に同じく基本的な文法問題である。問四の敬語と併せて、知識問題は早稲田レベルの受験生なら、確実に解く。落としてはならない。

問七 才《学問・芸術》・つかさこうぶり《官職と位階》、いずれも古文常識範囲内。

問八 「比翼の鳥」「連理の枝」やや高度ではあるが、古文常識の範囲。

問九 ニの、「何とか呼び戻そうと考えた」という記述が本文中に見出されない。ホは、「上に仕うまつらむ」という記述の解釈がポイント。この文章内で「上」は、宮廷ではなく、北の方であるということに気付けたか。幾度となく述べているように、「とある一つこと」に気付ければ解答にたどり着ける。これが早稲田大学の特徴であり、魅力である。

問十 基本的な文学史問題。問四～問六と同じく、早稲田レベルの受験生は確実に知っている知識である。